

灯火

赤川3546

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒埼ちとせと白雪千夜はいつもと変わらない朝を迎え、いつもと変わらない日常を送っていた。

しかし、ユニット「Velvet Rose」とは違う仕事が始まることによりいつもの日常に変化が現れ始める。

この作品はpixivとのマルチ投稿です。

目次

| | |
|--------------|----|
| いつもと変わらない朝 | 1 |
| 魔法使いの呼び出し | 5 |
| 千夜の変化、琴歌と共に | 16 |
| 千夜とプロデューサー | 26 |
| ちとせの変化、加蓮の情熱 | 35 |
| ちとせとプロデューサー | 49 |

いつもと変わらない朝

「おはようございます。朝ですよ、お嬢さま」

「うーん、もう少し……」

なにやら主従と思わしき少女が二人。

主と思われる少女は起きようとせず、寝返りを打って相手に背中を向けた。

長いブロンドの髪だけが見えている状況であるが、それだけでも美しくどこか絵になる。

従者らしき少女は主の反応に対して表情一つ変えない、いつものことなのだろうか。

短い黒髪に紫の瞳、顔つきは凛々しく主の自由さとは対照的な繊細な美しさを感じさせる。

「疲れが残っているのに夜更かしをなさるからです」

そんなことを言いつつ黒髪の少女は無慈悲にカーテンを開き、主の寝室には爽やかな朝日が入り込む。

日に照らされた家具たちは煌びやかでお嬢さまと呼ばれるだけはある内装だ。

「もうっ、千夜ちゃんのいじわる」

主の少女は気だるげに起き上がりながら不満を口にしてている、日の光を薄目で眺めるその瞳は淡い赤色に輝いている。

ただ、出てきた言葉は軽い不満であるが少女の表情はどこか楽しそうである。

「原因はお嬢さまの不摂生にあります、体調不良を起こされても困りますので睡眠は十分に取っていただきたいのですが」

「今のままでも十分じゃないかしら」

「お嬢さま……よもや休学して私と同じ学年にでもなるおつもりですか？」

「……その発想はなかったな……面白から千夜ちゃんの案採用♪」

「さすがにそのようなことになれば、あいつが口うるさく言ってくると思いますが」

「ふふっ冗談♪ 大丈夫、魔法使いに心配させるようなことはしないから。ああでも、心配するあの人は見てみたいかもしれない」

主の少女は楽しそうに語っているが、千夜の表情は険しくなっていく。

冗談とは言っているものの留年することを嬉々として語る姿を見ればそうなるのは当然ではある。

仕える身としては心配なのだろう。

「……そうですね、顔面蒼白になつて憔悴するあいつの顔はたしかに拝んでみたくはあるかもしれませんが」

千夜がそんなことを言って賛同すると、珍しいことなのか主の少女は少しだけ驚いてから嬉しそうに微笑んだ。

いつの間にか険しかった千夜の表情も穏やかなものへと戻っている。

「なんだか面白いね、千夜ちゃんが他人にそこまで興味を持つなんて」

「お嬢さまの戯れに対してどう反応するのか、私との違いを見てみたいのだと思います」

「なるほど……たしかに、あの人を振り回すのは楽しそう♪ 私の指揮で魔法使いがどう舞うのか楽しみね」

「……………」

楽しそうに話を続ける主の少女を眺めながら、千夜はなにか不穏なものを感じ取ったのか浮かない顔をしている。

さすがに少女も気づいたのか話を止めた。

「千夜ちゃん、どうかした？」

「……いえ、巡り巡って私に無理難題が降りかかるのでは、と」

「どうやら少女が魔法使いと呼ばれる人物を振り回していたらなぜか矛先が自分に向かつてくるのではと考えたようだ。」

「油断をしているときに限って災難が襲ってくるというのはよくある話……かもしれない。」

「大丈夫、きつと千夜ちゃんならなんでもできるから」

冗談でも言っているように明るく笑いながら少女は言葉を返す。

しかし、どこか本心からの言葉であるように感じられる。

「買いかぶりです」

「私はそう思わないけどなあ」

「……おや、もうこんな時間ではありませんか」

「長話をしすぎた？」

「そのようです。学校が終われば事務所に向かわなければなりません、今日も長い一日が始まりますよ、ちとせお嬢さま」

主の少女——ちとせに語りかける千夜の表情は徹かに楽しそうに笑っていた。

「そうだね、楽しみだな」

千夜の表情につられるようにちとせも笑顔になる。

それだけ今が満たされているのだろう。

魔法使いの呼び出し

「……遅い、自分で話があると呼んでおきながらお嬢さまを待たせるなど……」

スーツを着た人物——プロデューサーは部屋へと入るなりちとせと千夜にまず遅れたことへの謝罪をしたのだが、千夜は主を待たせたことへの不満が収まらないようだ。

一方のちとせはというと穏やかに笑っている。

「まあまあ、謝っているんだし許してあげましょう、千夜ちゃん」

「しかしお嬢さま……」

「私たちだけの魔法使いではないのだから、仕方のないことでしょうか？」

「……分かりました、お嬢さまがそうおっしゃるのなら」

ちとせに諭され、千夜は不満を口にするのをやめた。

プロデューサー側に仕事の打ち合わせが長引いたというきちんとした証拠があるのも大きいだろうか。

「それで、わざわざあなたが呼んだということはお仕事のことかしら？」

ちとせに問われるとプロデューサーは頷いた、二人を呼んでいるということは彼女たちのユニットで仕事ということなのだろうか。

「次の仕事……ですか、まあ私はどんなものであろうとお嬢さまのために……え、違う？」

「どうやら二人での仕事ということではないらしい、つまり……どうということだろうか。」

不思議そうなちとせ、困惑している千夜を尻目にプロデューサーは部屋の出入り口まで再度移動すると、廊下で待機していたと思われる人物を呼び込んだ。

「ごきげんよう、ちとせさん、千夜さん」

部屋に入ってきたのは、淡い桃色の長い髪をなびかせた優雅な雰囲気を持つ少女だった。

気品も感じさせる佇まいからは育ちの良さも窺える。

「ごきげんよう、琴歌ちゃん。もしかして次の仕事で一緒になるのはあなた？」

「ええ、私からぜひひとお願いしましたの」

「お久しぶりです。……なるほど、たしかにお嬢さまに相応しい方です」

千夜も納得している様子であるが、プロデューサーは首を横に振り琴歌が誰と仕事をするのかを告げる。

すると、千夜の表情が変わりプロデューサーを睨みつけた。

「お前……！ 私のような人間に西園寺のご令嬢の相手が務まるはずが——」

「そんなことありませんわ、千夜さん。そもそも、私があなを指名させていただいたのですから」

千夜の言葉を遮るように琴歌は自分が望んだことであると伝えた、一切の迷いもなく笑顔で。

自己評価が異様に低いからか、千夜は彼女の言葉に驚き絶句している。

琴歌が自分の内に何を見出しているか分からないのだろう。

「さ、西園寺……様……？」

「様なんてやめてください、それに琴歌で構いませんわ」

「……では、琴歌さん……なぜ私なのですか？ お嬢さまではなく……」

本当に理解ができていないのだろう、千夜のポーカーフェイスは影を潜め先ほどからずっと困惑している。

そんな彼女の様子を気に留めることなく、琴歌は柔らかに笑った。

「それはもちろん、千夜さんが可愛らしいからですわ」

「……………え？」

普通、可愛らしいは褒め言葉で喜ばれるはずの表現であるのだが、自己評価の低い千夜には理解が難しいようだ。

アイドルとなり以前とは変わってきているのだとしても、千夜の自分は無価値である

という考え方は簡単には覆すことはできないのだろう。

「あはっ、さすが琴歌ちゃん。お目が高い♪」

一方のちとせは琴歌の選択を大いに評価しているらしい。

千夜の可愛らしさを見抜ける人物がいることをとても喜んでる様子である。

「千夜さんもアイドルに、というちとせさんのご判断は正しいと思いますわ、千夜さんの可愛らしさを誰にも知らせずにいることは勿体ありませんもの」

「理解してくれて嬉しいなあ、千夜ちゃんたら自分はいいつて言つて全然表に立ちたがらないんだから」

「まあ、それは本当に勿体ありませんわ!」

心からそう思っているのか、琴歌は両手を体の前でグツと握っている。

外見だけならば千夜はあまり表情を変えないポーカーフエイスの美しい少女といったところなのだが、琴歌は主であるちとせに振り回されている様子なども含めて総合的に見て可愛らしいと言っているのだろうか。

「私が……本当に琴歌さんとユニットを?」

なにやらまた考え込んでいる千夜であるが、そこへプロデューサーが声をかけた。

「どうやらプロダクションが主催するライブで一緒に出演することになっているだけで、ユニット結成とまではいかないらしい。」

以前から準備をしていた企画ではなく、琴歌の希望をちように叶えられる機会が近くにあったということなのだろう。

多くのアイドルが所属しているプロダクションだからできる今回限りかもしれないお祭り企画……といったところか。

「ユニットというわけではないのですね」

プロデューサーの説明を聞くと、千夜はほんの少しだけ安堵したような表情で息を吐いた。

ちとせとのユニット、時間は彼女にとって本当に特別なものなのだろう。

「はい、そういうことなので少しだけ千夜さんをお借りさせていただいてもよろしいでしょうか、ちとせさん？」

「もちろん、千夜ちゃんと琴歌ちゃんのステージ……私も楽しみにしてるね♪」

「ありがとうございます、西園寺琴歌……精一杯がんばりますわ」

琴歌は満面の笑みで感謝の言葉を口にする。

「これほど喜んでくれるのなら、主であるちとせも嬉しいことだろう。」

「それで……私と琴歌ちゃんは良しとして、千夜ちゃんはどうするの？」

「……お嬢さまが良いとおっしゃるのならば——」

「ダーメ、私が命じたとかじゃなくて、千夜ちゃんがどうしたいのかちゃんと聞かせて」

自分の言葉を理由にしようとする千夜の言い分をちとせは遮った。

彼女自身の意思が感じられないのならば、琴歌に対しても失礼だからだろう。

「私は……琴歌さんとステージに立ちたいです」

琴歌を一瞥してから、千夜は自分の気持ちをちとせに伝えた。

その表情はいつもと変わらないはずなのだが、どこか高揚しているようにも見える。

そんな彼女を見て、ちとせも満足そうな優しい笑みを浮かべた。

「うん、楽しんできなさい。あ、でも、琴歌ちゃんの方がいいなんて言って浮気したらダメだよ？」

「それだけはありません、私は貴方の僕なのですから」

「……よろしい」

からかうように笑っていたちとせは、千夜の言葉を聞くとすつと真面目な顔になった。

ややオーバーな主従の会話にも見えるが、ちとせの表情は僅かに不満そうである。

「話もまとまったことですし、早速レッスンを始めませんか？ 実は、プロデューサー様

にお願いで空いているレッスンルームを使えるようにしておいたのです」

「え？」

「琴歌ちゃん、準備がいいね」

「時間は限られていますから」

琴歌の話を聞きながらプロデューサーは頷いている、ということは恐らく既にトレナーにも話をつけてあるのだろう。

もしかすると、千夜と琴歌のスケジュールも参加する前提で仮のものを作つてある可能性もある。

「お前、まるで私の答えが分かっていたかのようだな」

千夜の反応は不服というものではなく、素直に感心しているように感じられる。

共にした時間は少なくとも、ある程度の予測は立てられるということに驚いているのだろうか。

「未来視でもしたかのような予測、たしかに魔法使いとも言えるような迅速な仕事だ。本番まで同様に進めることができるのか、見物ですね」

最後まで言葉にしてから、千夜は微かに笑った。

控えめではあったがはつきりとした笑顔だった。

そんな千夜を見ることができたからか、プロデューサーも嬉しそうに笑っている。

「一番なのは、あまりプロデューサー様のお手を煩わせないことだと思いますわ」

「そうですね、やるからには万事順調に進めたいところです。ですから、準備もされているのならばすぐにレッスンへ向かいましょう」

「ええ、よろしく願います。千夜さん」

「こちらこそよろしく願います、琴歌さん」

「ではプロデューサー様、早速レッスンへ行ってきます」

二人を見てプロデューサーは頷き、後で様子を見に行くと言えた。

「できれば今後のスケジュールに關しても話し合いたい、どういつた予定を組むつもりなのかを教えてもらえるのなら助かります」

千夜がスケジュールを少々心配しているようなので、プロデューサーは仮ではあるが一応作つてあると伝えた。

その日程では今日の千夜は予定確認とレッスンにしてあるとも。

「お前にはどこまで見えているのか、少々気になりますね」

千夜は不思議そうにプロデューサーを眺めているが、プロデューサー自身はこうなつたらいいなと書いておいただけらしい。

「適当……まあ、言葉通りではあるか。それではお嬢さま、行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい」

「お前はまた後で、だ。無駄のないスケジュールを組ませてもらう」

プロデューサーは迷いなく頷く、現段階でもそれなりに考えて作られたものなのだろうか。

そして、千夜と琴歌はライブに向けての雑談をしながら部屋から出て行く。

特に二人の間に問題もなさそうで、プロデューサーとちとせは心配する様子もなくその背中を見送った。

「行っちゃったね」

部屋に二人だけになると、ちとせが横目で見ながらプロデューサーに話しかけた。

プロデューサーは彼女の言葉にただ頷いた。

「これで良かったんでしょ？ 私も一緒に呼んだ理由って、千夜ちゃんの背中を押してほしかったんだよね？」

隣に立っていたちとせは、プロデューサーの顔を見上げるように首を傾げた。

「どうやら自分が役割を全うできたか気になっているようだ。」

「期待以上？ なら良かった♪」

プロデューサーは千夜だけ呼んで説明しても話が進まないと考えていたらしい。

確かにその考えは正しく、ちとせに言われるまで千夜は自分の答えを出さなかった。

「琴歌ちゃんと仲良くなれそうなのも安心したかな。私と一緒にいられなくなったら、西園寺の家にメイドとして雇ってもらうのもいいかもしれないね」

などということをしたずらっぽく笑いながらちとせは語る、しかしその内容自体はどこか暗い。

一緒にいられないと遠回しに表現しているが、二人がそうなるのはかなり特殊な状況であることは間違いない。

普通、あえていなくなる想定は一九歳でするものではない。

ということは、そう遠くない話……ということだろうか。

そして、プロデューサーは千夜がちとせ以外の誰かに仕えるとは思えないと口にした。

「……分かってる、今の千夜ちゃんはまだ私の僕であること以外を望まない。だからこそ、あなたの力が必要なんだよ、魔法使いさん？」

信頼している、とでも言うかのような笑顔をプロデューサーに向けるちとせ。

二人がユニットでデビューするとき、プロデューサーの能力を近くで見ながらより信頼できるようになったのだろう。

「千夜ちゃんが自分だけの力で歩けるように、導いてあげて」

ちとせは自分のことは語らない。

アイドル活動を楽しく感じているのは間違いないのだろうが、あまり先の話はする気にならないということなのか。

プロデューサーはそんなちとせを心配そうに見つめている。

「どうしたの、なんか変な顔してるよ？」

プロデューサーの気持ちを知ってか知らずか、ちとせは穏やかな表情で語りかける。「……え、私には会ってほしい人がいる？ 千夜ちゃんの説得だけが目的ではなかったんだね。もしかして、一緒にライブに出ることになりそうなの？」

ちとせの予想に対して、プロデューサーは頷いた。

「どうやら千夜と琴歌のように進めるつもりはなく、まずは相性的なものを見たいようだ。」

「その子の名前は……うん、分かった。北条加蓮ちゃんね」

千夜の変化、琴歌と共に

翌朝、レッスンスルームでは千夜と琴歌がトレーナーの指示を受けダンスレッスンを
行っていた。

琴歌は息が上がっているものの、どこか楽しそうな表情で真剣に取り組んでいる。

千夜は呼吸は少し乱れているが涼しそうな顔をしてレッスンをこなしている。

鍛えていない人であれば琴歌と同じくらいになるのだろうが、千夜はちとせに仕える
身であるからか体力や運動神経に優れているようだ。

「よし、一旦休憩だ。呼吸を整えておけ」

「はい」

休憩に入ると、琴歌は水分を補給し深く呼吸をしながら息を整えようとする。

西園寺というかなり大きな家の令嬢である琴歌は、さすがに体力自慢とはいかないよ
うだ。

といってもプロのダンスレッスンのだから、運動部に所属し活躍していたという人
でもなければこうなってしまうのは必然。

あまり苦しそうではなかった千夜も、しっかりと水分補給を行い呼吸を整えている。

「……………」

「琴歌のことが気になるのか、千夜は彼女のことを少し観察している。

どこか明確にちとせと違う部分でもあるのだろうか。」

「千夜さん、どうかしましたか？」

「あの……琴歌さんは体力がある方ですか？」

「いえ、お恥ずかしながら……プロダクションの中ではない方だと思います」

千夜の質問に対して、琴歌は少し頬を赤くして答えた。

多数のアイドルを抱える事務所なのだから、体力自慢のアイドルも多く所属しているのは当然。

スポーツ特待生というわけでもないのだから別に恥ずべきことではないのだが、上の方は体力お化けのレベルでつい自分と比較してしまったりするのかもしれない。

「……………そうですか……………」

「琴歌の返答を聞くと、千夜はなぜか真剣に考え込んでしまった。」

「ちとせさんのことが気になるのですね？」

「なにを考えているのか思い当たることがあったのか、琴歌は聞いてみることにしたよ
うだ。」

そして、それは正解だったらしく千夜は驚いた表情に分かりやすく変わった。

「はい、よく分かりましたね」

「最初のレッスンのときに貧血で倒れてしまったと耳にしていましたので」

「そうでしたか……」

千夜の表情に影が差し始める、どうにも不安があるのだろうか。

そんな彼女を見て、琴歌は少し焦りつつ付け加えた。

「お気になさらないでください、朝食を抜いたりすればそういうこともあります。そういった事例を私もいくつか聞いていますから」

「お嬢さまはその日、軽食ではありますがしっかりと摂っていました」

「ということは、睡眠不足や体調不良かもしれないかもしれませんがね」

「……たしかに、お嬢さまは夜更かしすることを好みます」

千夜の言うとおり、二人が呼び出された日の朝もちとせは夜更かしをしていたらしく寝不足の様子だった。

それに加えて朝食は軽めで済ませたのなら、体調次第で貧血の症状が現れるのも不思議ではない。

「そうなんですね、夜がお好きなんでしょうか？」

「好き……なのかは分かりませんが、寝付けないとおっしゃって庭を散歩して朝寝坊ということがあります」

「なるほど、つまりちとせさんは夜型というやつなのですね！」

両手を軽く叩き、ずばり閃いたと言うかのように嬉しそうな顔をして琴歌は結論へと達した。

なぜ寝付けないのかはともかく、深夜に行動をしたがるのは確かに夜型と言えるだろうか。

「夜に作業した方が捗るというアレですか、たしかにそうかもしれません」

「羨ましいですわ、私は夜更かしをしようとしても眠くなってしまうもの」

「それは正しい生活リズムをとという方針のおかげでしょう、良いことだと思います。少なくとも、寝坊をするよりは」

困った表情でため息をつく千夜、しかし怒っていたり呆れていたりにするようには不思議と見えない。

むしろ、ちとせに振り回されることを楽しんでるようにも感じられる。

「ふふつ、仲がよろしいんですね」

そんな千夜を見て、琴歌は柔らかい笑顔を見せた。

少し変わった主従の関係だからだろうか。

「仲が良い……のでしょうか」

「ただ雇われているというだけではない、特別な関係に見えますわ」

「それは当然です、私はお嬢さまの僕。雇われているのではなく仕えているのですから」
それが自然な形なのだと言うかのように淡々と千夜は語る。

琴歌は彼女の話を聞くと少し考えるような仕草を見せた。

「琴歌さん、どうかしましたか？」

「いえ、私にはメイドに同じ歳の親友がいるのですが、私とその子の関係とも少し違うようなんです」

「そう……なんです。しかし、それも当然です。私とお嬢さまは友人という対等な関係ではありませんから」

西園寺家の令嬢に、雇っているメイドの友人がいるということに千夜は驚いたようだ。

ただ、自分たちと近い関係なのかと感じていた琴歌に対して明確に否定をした。

「ですが、お嬢さまが特別な人であるということは間違いありません」

「理由を聞いても？」

「ええ、簡単な話ですから。お嬢さまは全てを失った私に居場所と目的を与えてくれた方、それだけです」

「なるほど、ちとせさんは千夜さんの恩人なのですね」

合点がいったという様子の子の琴歌。

たしかに、千夜の話を書く限りでは間違ひなく恩人である。

そして、全てを失つたに言及しないのは辛い話を彼女自身からというのを避けるためだろうか。

「恩人……そうですね、主であり恩人である、というのが近い表現かもしれません」

「ふふつ、これで千夜さんやちとせさんのことを少しは知ることができたでしょうか」

「お嬢さまはともかく、私のことなど知って嬉しいのですか？」

「もちろんですわ、同じステージに立つ方ということもありますが……実は、メイドの親友の子にお二人のことを話したら興味を持ったようで」

「まあ、立場だけで言うなら同じではありませんね。そういうことならば興味を持つのも分かる気がします」

千夜は理由を聞くと少し納得できたようだ。

自分が琴歌のメイドの側だったとしても不思議に思うだろうという自覚があるらしい。

「もし私が誘つたらアイドルになるのか尋ねてみたら、自分には無理だと言っています。だからこそ、千夜さんがちとせさんと同じステージに立っているということがとてもすごいと思つているとも言っていましたよ」

「私はあくまでお嬢さまの戯れに従つていただけです。それに、お嬢さまを輝かせると

いう役割、私をもっとも上手くできるといふ自負もありました。まさかユニットとして隣に並び立つことになるとは思っていませんでした」

「淡々と語ってはいるが、千夜の表情や言葉に乗る感情から自信と誇りが伝わってくる。」

ちとせのために、やはり彼女にとって行動する一番の理由はそれなのだろう。

そんな言葉を聞き、琴歌は笑った。

今までのような優しいものではなく、どこか力強さを感じる笑顔だ。

「千夜さんのその自負、たしかなものだったと思いますわ。私、お二人の作り上げた世界に心を動かされましたもの」

「ありがとうございます、そう言っていただけなのは素直に嬉しいですね」

「ですが、私が千夜さんと作り上げるステージもきつと素晴らしいものにできると思っていますわ。千夜さんはどう思いますか？」

「もちろんです、やるからには最高の……」

言葉を途中で切り、千夜は少し驚いた表情で上胸部に触れている。

「あまり自分らしくない言葉であると感じ、自分の心に触れようとしているのだろうか。」

「千夜さん、大丈夫ですか？」

突然のことだったので、琴歌はやや心配そうな顔をしている。

それを見たからか、千夜は一度深呼吸をしてからもう一度琴歌に向き合った。

「問題ありません。お嬢さまに見せても恥ずかしくない素晴らしいステージを、そう考
えていたことに驚いただけです」

「そうでしたか、千夜さんもそう考えていてくださったのはとても嬉しいですわ」

安心したのか、琴歌にも笑顔が戻る。

千夜もその反応のおかげか表情が穏やかだ。

「まさか、私の中にこれほどの火が灯っているとは思いませんでした」

「きつと、お二人のステージに千夜さん自身も心動かされたのでしょうね」

「たしかにあの場所から見えた景色には言葉を失いましたが……。そうですね……。今、

私は新しい景色を見たいという高揚を感じているようです」

「それは私も同じですわ。だから一緒に……。新しい景色を見に行きましょう」

琴歌はそう言って千夜へと片手を差し出した。

不意の行動だったからか少し驚いた表情を見せたが、千夜は微かな笑顔を浮かべてそ
の手を取った。

「私には勿体無いお誘いですが……。ありがとうございます、琴歌さん。私を選んでくれ
て」

「そんなことはありませんよ、ただ単純に私は千夜さんの魅力に惹かれたというだけなのです。ところで千夜さん、可愛らしいものに興味ありませんか？」

「…………え？」

「私、事務所に可愛らしいもの愛好会を設立したいと考えています。会員を募り増やしてから申請をしようと考えているのです」

もはや学校の同好会のノリではあるが琴歌はどうやら本気のようなのだ。

冗談だと言いつつ雰囲気はまるでない。

「私にはあまり分かりませんが、なのでお断りするしかないので……。恐らく、お嬢さまは興味を持つかと」

「まあ、残念ではありませんけど素晴らしい情報ですわ！　ありがとうございます、千夜さんー！」

「礼には及びません。ただ、お嬢さまのことですから、すぐに興味を失ってしまう可能性もあります」

「そうなってしまう場合は仕方のないことですわ、だからそうならないよう活動していくのみです」

琴歌は明るく笑っている、簡単には折れそうにない意志があるように思える。

まだ設立には至っていないが、この熱意があればいずれは思いが届くだろう。

「……そろそろ再開でしょうか」

「そうですね、結構話し込んでしまいました。休憩中だというのに申し訳ありません」

「いえ、私も琴歌さんのことを知ることができて……そうですね、嬉しいです」

「これからもレッスンの合間にもお話できると嬉しいですよ」

「琴歌さんが望むのであれば、私の話で今後もしめるかはなんとも言えませんが」

「大丈夫です、きつと楽しくお喋りできますわ」

「私には分からない根拠……ですね、私自身のことでもあるのですが」

二人はお互いを見合って笑い合う。

関係は良好のようだ、恐らくプロデューサーの心配もそこまでいらないかもしれない。

千夜とプロデューサー

事務室にノックの音が響く。

プロデューサーがどうぞと返事をする、千夜が部屋へと入ってきた。

「……お前だけのようですね、好都合です」

スケジュールの話はレッスンが終わる頃に琴歌と共に既に終えている。

だからか、千夜がやってきた理由が見えずプロデューサーは首を傾げた。

「スケジュールに不備があったか？ いえ、そういう理由ではありません。少し気になることがあったので確認に」

そう言うと、千夜はまっすぐにプロデューサーを見据える。

なにかをはつきりとさせたいのか、どこか凄んでいるようにも見えてしまう。

「お嬢さまの体調について何か話は聞いていますか？」

「どうやらちとせのことのようだ、琴歌と共にレッスンをしたことでやはり主の体調に不安を感じたのだろう。」

しかし、それに関しては生活を共にしている千夜の方が把握しているはずである。

「……たしかに、お嬢さまはよく貧血を起こす体質であり朝に弱いのもそれが原因であ

ろうということは知っています。一年の休学を必要としたほど体が強いわけでもないことも知っています。ですが、はつきりとした原因を教えられたことはありません。そういう体質だからとしか。だから、お前にならもしかすると話をしているのかも思っただけです」

知っているのなら教えてほしい、ただそれだけのようだ。

だが、プロデューサーは首を横に振った。

それを見て、少しだけ千夜は落胆したような表情になった。

「本当に聞かされていないのですか？」

再度聞かれてもプロデューサーが首を縦に振ることはない。

ただ、あまり体が強くないことだけは聞いていて心配はしているとだけ付け加えた。

確信がないからか、あまり長くないことを匂わせる言葉を聞いていることは伝ええないようだ。

「そうですか、なら仕方ありませんね。……やはり、体力がつくよう食事からアプローチをかけてみるべきでしょうか」

千夜は食事による体質改善を考えているようだ、どこまで効果があるかは分からないが何もしないよりはいいはずだ。

そして、もう用は済んだのかプロデューサーに背中を向ける。

だが、何かを思い出したのかプロデューサーは千夜に声をかけた。

『晩ごはん』のユニット名で琴歌さんとデビューするか、だと？ お前……それは忘れろと言ったはずですが』

千夜は怒気を含んだ目でプロデューサーを睨んだ。

プロデューサーは冗談であることを強調しながら両手を上げる。

「まったく、冗談ならせめて笑えるものにしてほしいですね。そもそも笑わない？ ふつ、人間観察が下手ですね。私だって笑っていますよ、お前に対しては嘲笑がほとんどかもしれないが」

今まさにほんの一瞬微かな嘲笑を浮かべていた千夜に対して、プロデューサーはいつか笑わせてみせると豪語した。

が、しかし、それを聞いた千夜はため息で一蹴する反応を見せる。

「漫才師にでも転職するつもりですか？」

呆れた様子の千夜から出てきた言葉に対し、プロデューサーはニコリと笑う。

「……相方のツツコミ役は私がいい？ 冗談は笑えるものにしろと先ほど言ったばかりでしょう」

千夜は再度プロデューサーを睨みつける。

ただし、今回は二度目だからかプロデューサーも笑えないくらいでちょうどいいと言

わんばかりの気にしないスタイルである。

深く息を吐きながら千夜は視線を下に下げた。

「はあ……お前と話していると疲れます」

そのまま回れ右をして帰ってしまいそうな雰囲気があったので、プロデューサーは急いで連絡事項を伝えた。

急を要するようなものでもないが、伝えておくべき内容だ。

「……え、お嬢さまは人に会っているから帰りが少し遅くなる？ ……そうですか」

予想外であったのか、千夜の表情からは動揺がうつすらと窺える。

そんな彼女の反応を見て、プロデューサーは口角を少しだけ上げた。

嘲笑っているというよりは優しく見守っているという表現が正しい。

「その顔はなんですか、あまり見ていて気持ちの良いものではないですよ。お嬢さまと共にいられない時間に慣れておいた方がいい？ それは……そうですね、今回の私のように別々で仕事をするが増えていくのではありませんから。慣れておいた方が……」

千夜の表情を見て不安を抱いたのか、プロデューサーは彼女に声をかけた。

やはり、まだまだ千夜にとってちとせは欠くことのできない存在なのだろう。

「仕事の方はどうかと言われても……琴歌さんと共にいた時にも伝えただけです、今のところは順調であると。そもそも、始まったばかりでどうもこうもないと思います」

プロデューサーは首を横に振り、どういう意図の質問であったのかを伝える。

要するに、ちとせ以外のアイドルとの仕事が始まってみてどう感じているかを聞きたいようだ。

「どう感じているか……と尋ねられて返答に困ります。まず、私はお嬢さま以外の方とそこまで深くは関わったことがありませんから。強いて言えば、琴歌さんとはそれなりに上手くやっていけそうだという漠然とした実感はあります」

琴歌が千夜に対して好意的であるということ、そして千夜自身も琴歌の人柄を快く受け入れられているからこそその実感だろう。

ちとせに仕える身として、同じように名家の令嬢である琴歌は親しみやすい部分も多いのかもしれない。

「現状確認を大切に考えるのは良いことでしょうが、もう少し経過してからの方が私も正しい評価を下せると思います」

千夜に賛同するかのようになり、プロデューサーは少し困ったような笑顔を浮かべた。

彼女がちとせと一緒にではない新しい仕事に打ち込んでいるのか、どうしても気になつてしまったのだろう。

「お前、過保護の気があるようですね。どうせ心配をするのならば、私などではなくお嬢さまが万全の状態の仕事に挑めるように気を使ってほしいものですが」

千夜は自分のことはいいからといういつものスタンスである。

ただ彼女は一つ勘違いをしている、過保護になる対象は一人だけに限らないのだ。

何かしら懸念となる要素があるのならば、百を優に超える人数も全て過保護の対象になる。

人数は状況に応じて変化するというだけ。

「……なるほど、お嬢さまに対しては当然であり、同時に私のことも気にかけている……ということですか。……え、更に琴歌さんたちも？」

二人よりステージに慣れているとはいっても琴歌だつて全て完璧とはいかない、だからこそ出演する全員に対してフォローの準備をしておく。

それが自分の仕事というものだと言うようにプロデューサーは頷いている。

本番に起きるアクシデントはそれこそ予想外のことばかりだろうが、それでも想定で済むことに対して準備を怠らないことがプロなのだ。

「ずいぶんと大変な仕事そうですね、プロデューサーというのは」

プロデューサーの話聞いた上での、千夜の単純な感想。

そんな彼女の話を聞いてプロデューサーも頷いている。

しかし、その表情に憂いはなく笑顔を浮かべていた。

「すごく大変だけどその分楽しいから大丈夫……ですか、なるほど。あのステージを経

験しているからこそ、私にも分かる気がします。あの高揚感や一体感や達成感のためになら努力ができる、それは裏でサポートをしている者にとっても同じということですね」

プロデューサーは頷いた、スポットライトを浴びる側でなくともその場を作り上げ支えることがやりがいがあり楽しいのだと。

そして、プロデューサーは改めて聞いた。

千夜は今、楽しいのかと。

「……そうですね、今日初めてお嬢さま以外の方とレッスンをしたわけですが……不思議と高揚のようなものを感じていました。楽しかったのだと思います……お嬢さま以外の方とであつても……」

上胸部に手を当て、自分の心を確かめるように千夜は言葉を紡いだ。

彼女の思いを聞いて、プロデューサーも実に嬉しそうな表情をしている。

そしてその表情を見て千夜はどこか不服そうである。

「そのニヤケ面はなんだ、始まったばかりだというのに気を抜くのは感心しませんね。先ほど偉そうなことを言っておいて、極々単純な見落としをすることになつても知りませんよ」

どうやら千夜はちとせ以外とでも楽しいという言葉に喜ぶ暇も与えてくれないらし

い。

プロデューサーも気を引き締めなおそうという真面目な表情を作っている。

それを見てから、千夜は一つ息を吐いてプロデューサーに語りかけた。

「心に灯った小さな火が……少しずつ大きくなっているのを感じています。以前、私はお前に変えられてしまったと言いましたが、本当は変わっている最中なのでしょう。そういう意味ではこれからどうなっていくのか……期待していますよ、プロデューサー」

千夜は不敵に笑った。

自分を客観的に見ているようでもあるが、自分の変化の先を楽しみにしているようにも見える。

プロデューサーがしっかりと頷くのを見て、千夜はいつもの張り詰めたような表情へと戻った。

「それでは用も済ませたので私は帰ります、晩ご飯の準備をしなければいけませんから。……ええ、気をつけますよ。レッスンで疲れていますから当然です。それでは失礼します」

プロデューサーの過保護な言葉を受け千夜はやや砕けた表情を見せると、すぐに背を向け部屋から出て行った。

再度部屋に一人となったプロデューサーは少しやり取りを思い返しながら、嬉しそうに笑う。

千夜が見ていたら指摘されそうな笑顔である。

そして、プロデューサーは気持ちを切り替えると再度机に向かい作業を再開させた。

ちとせの変化、加蓮の情熱

とあるハンバーガーショップの二階の窓際、差し込んでくる夕日を浴びながら二人の少女が会話をしている。

一人はちとせだ、長いブロンドの髪も白い肌も淡い赤色の瞳も夕日に照らされるとより一層神秘的である。

もう一人は鎖骨にかかる程度の長さの明るい茶髪を二つに結んでいる、そして瞳の色も明るい茶色だ。

ネイルに気を使っているのか、綺麗に手入れされた彼女の爪は夕日に照らされ煌いている。

彼女がちとせが会うことになっている北条加蓮だろうか。

どちらにせよ、二人とも色白の美少女であるのでかなり目を引く。

「ごめんね、どうしてもポテトの新しいの食べてみたかったんだ」

「気にしないで、加蓮ちゃん。私あまりファーストフードのお店に寄らないから、新鮮で楽しいよ」

加蓮は自分の目的のためにここで会うことになったことを謝っているようだ、そして

手馴れた手付きで会話の合間にひよいとフライドポテトを口へと運んでいく。

新フレーザーバーが気になり立ち寄るといふことはかなりポテトが好きらしい。

ちとせはもそもそとシンプルなハンバーガーを食している、口を開けた瞬間ちらりと鋭い牙のようなものが見えたように思えるが恐らく気のせいだろう。

「うーん、ちよつと微妙かな。やつぱり塩が一番かなー」

加蓮はなにやら難しい顔をしながらそんな評価を下した。

悪いとまでは言わないが期待を超えるものではなかったようだ。

そんな彼女の様子を見て、ちとせは楽しそうに笑っている。

「加蓮ちゃん、ポテト好きなんだね」

「んー、そうだね、なんか病み付きになっちゃった感じ」

「ふむ……。うん、なんとなく分かるかも……。？」

セットでついてくるシンプルなフライドポテトを食してみて、ちとせはそう答えた。

加蓮はその答えを聞いて実に満足そうに頷く。

「やつぱ美味しいよね、ポテトー」

「千夜ちゃんの料理には及ばないけど、こういうのも嫌いじゃないかな」

「その千夜って子は一緒にアイドルになったメイドなんだっけ？」

「まあそんな感じかな、厳密に言うならメイドじゃなくて私の僕ちゃんだけ♪」

「僕ちゃん……？ 奈緒なら分かるのかな」

メイドと僕の違いがあまりよく分からないのか、加蓮は首を傾げている。

もし千夜がこの場にいたのなら、二人の関係性を解説していたのだろうか。

「奈緒？」

「あーそっか、まだ奈緒にも会ってないんだよね。奈緒はアニメとか好きでさ。なんていうか、自分ではツンツンしてると思ってるけど人の良さが滲み出ちゃってるっていうか……」

「なるほど、かわいい子なんだ」

なんとなく伝わったと言うように手をポンと叩くちとせ。

加蓮もそれだと言うように指を指す。

「そう、かわいいの。本人に会ったらちゃんと言ってあげて、すっごい喜ぶと思うから」
加蓮はいたずらっぽく笑った、なにか企んでいるように見えなくもない。

その反応から、ちとせはなんとなく察したような表情を浮かべた。

恐らく、奈緒は直接かわいいと言われることを好まないか物凄く照れるかのどちらかのタイプなのだ。

嫌がることをしようという表情には見えないことを踏まえると、奈緒は直球で褒められると照れてしまう性格なのだと推測される。

「そうだとすれば、一応褒められて喜ぶことには喜ぶのだろう。」

「加蓮ちゃんは、その奈緒ちゃんって子と仲がいいんだね」

「そうだね、友達で、仲間で、ライバルって感じ」

「……そうなんだ、いい関係だね」

ちとせは少し羨ましそうな表情でそう言った。

加蓮の言葉から対等でかつ強い結びつきがあるように感じられたからだろうか。

一方の加蓮は、なぜか不思議そうな表情をしている。

何かしらの違和感があるのだろうか。

ただ、今はとりあえず気にせず会話を続けることにしたようだ。

「ちとせ……さんもその千夜って人と仲良いんじゃないの？」

「仲はいいけど、千夜ちゃんとは友達っていうのとはまた違うかな。あと、ちとせでいいよ、同じ高校生でしょ？」

「そっか、高校生なんだよね。じゃあ遠慮なく……あれ、高校生？」

「プロフィール見させてもらったけどたしか歳は……」

「一九だよ、私一年間休学してるんだ」

ちとせは笑いながらそんなことを言っているが、楽しそうには全く見えない。

聞いている加蓮も、どう反応したらいいのか迷っている様子だった。

しかし、何かを思うことがあったのかやや渋い表情を見せた。

「……なんとなく見えてきた気がする」

加蓮はちとせにも聞こえないであろう小さな声で呟いた。

恐らく、最初のレッスンでちとせが倒れたという話は耳にしているのだろう。

そのことと、一年間休学をしていたことを繋げて考えていくと何かが見えてくる。

まだ推測の段階であるが、なぜ加蓮をプロデューサーが選んだのかという部分まで踏まえて考えるとちとせの情況が少しだけ分かってくるかもしれない。

「加蓮ちゃん、どうかした？」

「ううん。もしかして、ちとせって体力ないのかなーって。私も……学校とか行けてない時期があつて、だからか最初のレッスンのとき大変だったんだよね。ちよつと貧血起こしちゃつてさ〜」

「あれ、そうだったの。じゃあ私たちは貧血仲間っていうことね♪」

ちとせにようやくやく楽しそうな表情が戻った、話の内容自体はあまり明るい話ではないが。

それでも、自虐のようなものだとしても笑い飛ばせるような雰囲気の方がいいだろう。

「素直に喜べない繋がり……。でも、志希も入れて貧血トリオユニット組めちゃうね」

「志希？」

「えーつとね、一言で言うくと天才ってやつ？ 飛び級で海外の大学行ったのに、なんか今は日本に戻ってきてきて普通に高校生やってるアイドル」

「へー面白い子♪ とうか、変わった人が多いね、ここ」

「所属してる私が言うのもあれだけど……否定しないよ、それ」

そんなことを言う加蓮の表情は困っているようにも見えるが、どこか楽しそうにも見える。

この場所だからこそ出会えた人たちばかりなので、ネガティブな感情は抱いていないのだろう。

「つまらない、なんて思うような暇はなさそうだね。楽しそうでなにより、あの人の誘いに乗って正解だったな」

「誘われたってことは、ちとせもスカウトだったんだ」

「うん。もしかして、加蓮ちゃんも？」

「そうだね、まあ……最初は断ったんだけど、プロデューサーさんが諦めなかったから根負けしちゃった」

加蓮は肩をすくめて笑っている。

ただ、根負けしたというよりはプロデューサーを信じようと思えたの方が正しいかも

しれない。

言葉を交わしている相手がちとせだから言わないと思われるが。

「私も大体同じかな、目が合ったただけだったのに何日も私を探してるから、声をかけてあげることにしたんだよね」

「えっ、なにそれ……ほぼストーカーじゃん。もし警察沙汰になったらちひろさんにめっちゃ怒られるのに、よくやるなあ……」

どちらかというと、なぜちとせを探していると分かっているかの方が不思議である。目を見ると興味を引いたのか分かるのだろうか。

「まあ悪質ではないからギリギリセーフ？ でも、自分の中に何を見出してあんなに必死になってくれるのか、それが知りたいから誘いに乗ったんでしょ？」

「たしかに、私には何も無いよって言ったのにどうしてなんだろうとは思ったかな」

その日のことを思い返すように目を瞑る加蓮。

スカウトを受けたときのこととは彼女にとって大切な記憶のはずだ。

恐らく忘れるということはない、自分の明暗を分ける転換期。

「ちとせもそんな感じだったの？」

「私は……占いで聞いてたから、きつとこの人がそうなんだなって思っただけかな。それに面白そうだったし」

「占い?」

「そう、いつか魔法使いが誘いに現れ変化の時が訪れるってね」

ちとせは冗談を言うかのように笑っている、非常に真意が分かりにくい。

加蓮も真偽を探っているように見える。

「プロデューサーさんが魔法使い……分かるような分からないような」

「普通の女の子に煌びやかな衣装を着せて舞台の上を送り出して多くの人を魅了させる、まるで魔法じゃない?」

「まあ……そうか、前の私だったらステージの上で歌って踊ってなんてありえないし」

加蓮の言葉に興味を持ったのか、ちとせはその赤い瞳で加蓮を見つめる。

「そうなの? なんだか強い意志を持つてるように見えたから、少し以外かな」

「私ってそう見えるんだ。でも、そう見えるのはたぶん変わったからだよ。ちとせの言う魔法使いさんによる変化ってやつのおかげかな」

肩をすくめながら語る加蓮だが、口角が少し上がっている。

自分でも自覚できる程度には変わったと感じているのだろう。

「いい変化だったっていうのは、今の加蓮ちゃんを見れば明白だね」

「まあね、自分で認めるのってなんかおかしな感じだけど。……それで、ちとせはなにか変わったの?」

「うーん、変わってる最中……なのかな。まあ、私は今が楽しければそれでいいから。あまり先のことまで考えないようにしてるの」

「……………」

加蓮の表情がやや強張った。

それは怒っているようなものではなく、なにか真剣に考えているようだ。

ちとせの言葉に気になる部分があったのだろうか。

「加蓮ちゃん、どうかした？」

「……別に、なんでもないよ」

「加蓮ちゃんの話、私は聞きたいって思ってるけどな」

ちとせの赤い瞳は優しく加蓮を見つめている。

なにか抗いがたい誘惑を感じる、それは恐らく勘違いではないはずだ。

それを証明するかのように加蓮は視線を外しながらではあるが口を開いた。

「面白い話じゃないって、私とちとせって似てるのかなって思ったっていうだけの話だから」

「似てる？」

「そう、私あんまり体が強い方じゃないからさ。ちとせもそうなのかなって」

加蓮の言葉に対して、ちとせは驚いた様子もなく穏やかに笑って見せた。

ただ、どこか寂しげに感じる表情だ。

「たしかに似てるとは言えるかもしれないけど、私たちは根本的な部分が決定的に違う。少なくとも、加蓮ちゃんは先を見ても道がはつきり見えてる。枝分かれした分かれ道がたぶんかもしれないけど、道自体は見えてる。そこが違うの」

「……でも、アイドルはできるんですよ?」

「まあ、ね」

「言っておくけど、私はステージに立つ以上ちとせに合わせてダンスの難易度下げるとかしないから」

語気を荒げることもなく、加蓮は淡々と語る。

その言葉の内には怒りの感情はなく、ただただ自分の意思を伝えているというだけのように感じ取れる。

聞いているちとせも激しい感情のようなものは見え、むしろどこか嬉しそうにすら見える。

「そういうことなら、加蓮ちゃんに楽しっているとかわれないようにがんばらないとね」

「そういうの分かるつもりではあるけど」

「あはっ、頼もしい♪」

ちとせは明るく笑ってみせているが、加蓮の表情は変わらない。

色々なことを考えているのだろうか。

「なんにせよ、まだ決まってるとはいえずプロデューサーさんは私たち二人が作るステージに可能性を感じた。私はそれをちゃんと理解したい」

「加蓮ちゃん、結構情熱的なんだね」

「えっ、そう……かな」

ちとせに指摘された加蓮は首を傾げて不思議そうにしている。

そういつたことを言われたことがないのか、あるいはあまり面識のないちとせに対してそういった内面が出ていることが考えられないのか。

一般的に、慣れ親しんだ相手でもないのに根に近い内面を見せるというタイプの人物は多くはないだろう。

それを踏まえると、後者である可能性が高い。

「内に秘められた情熱って感じで素敵だと思うよ。でも、そうだな……その情熱を燃やすすことができる理由が知りたいな」

ただの興味本位というだけには見えない、真剣な表情でちとせは尋ねた。

すると、加蓮はちとせの瞳を見つめて口を開いた。

「アタシはね……忘れ去られることが怖い。北条加蓮っていうアイドルがいたんだってどこかに残したい、存在を刻み付けたいんだ。アタシ一人じゃ難しくても仲間とならで

きると思ってるし、みんなとできたら嬉しいとも思ってる。それが理由」

「存在を……刻み付ける……、やつぱり情熱的だね。羨ましくくらいに」

加蓮の言葉を聞いたちとせは、本当に羨んでいるような悲しげな表情をしている。

自分には難しいという考えだろうか。

一方の加蓮は、またも首を傾げながら不思議そうな表情をしていた。

何かが気になっているのだろう。

「そう言ってもらえるのは嬉しいんだけどさ、なーんか変なんだよね。私ってほぼ初対面のちとせにこんな話しちゃうタイプじゃないはずなんだけど」

「相性ってやつじゃない?」

「それもあるかもしれないけどさ。ちとせの嘘っぽい噂が本当なんじゃないかって気はしてくるんだよね、吸血鬼だっていうやつ」

そんなことを口にする加蓮の表情は事実を語っているとはとても思えないようなどこか呆れているようなものである。

自分がほぼ初対面のちとせに対してここまで話すとは思えないが、ちとせが吸血鬼であるという噂も信じていないが、もしそうだとするのなら説明ができるかもしれない、という心境だろうか。

対してちとせは隠していた真実が明らかになったという様子もなく、馬鹿にされてい

ると感じている様子もなく、受け流して終わりとても言い出しそうなんでもない表情をしている。

異質な存在であると後ろ指を差されることに慣れているのだろうか。

「へー、そんな噂あるんだ。でも日の光を浴びても大丈夫だよ？」

「そうなんだよね。でも、奈緒が吸血鬼には人を魅了して従わせる力があるって話をしたから、そういうのかなって」

「なるほどね、でもそれを私に言うのって本当だったらまずいんじゃない？」

「本当に魅了されてるなら意味ないでしょ、反抗もできないんだろうし」

「そっかそっか、たしかにそうだね♪」

気づかなかったなくなんて言うように明るくちとせは笑っている。

それを見て、加蓮も真面目な表情ではなくなっていた。

本当だとしたらこれほど軽い反応をするとは思えないのだろう。

「やっぱりただの噂だよね。ちとせって吸血鬼っぽく見えなくもないけど、なんか少し違うような気もするし」

「加蓮ちゃんがそう感じるならきつとそうなんだよ」

「そんな投げやりなオチ？ まあいいけどさ、てゆうーか私ばかり話をしててちとせの話聞いてない！ ちょっとバランス悪いと思う！」

「そう？　じゃあ何から話そうか」

「実はちよつと気になってたことがあるんだ。ちとせって名前は日本人だけどき、見た感じハーフとかクォーターだよね」

「クォーターだね、長いことルーマニアで暮らしてたんだ」

「ルーマニア……えつと、ヨーロッパ……でいいんだっけ？」

記憶を辿り首を傾げる加蓮を眺めながら、ちとせは優しく微笑む。
日本で暮らし始めてから定番のようなやり取りなのかもしれない。

「そうだよ、ヨーロッパの南東の方」

「うーん、習ったはずなんだけどな。なんかごめんね」

「日本から遠い国だから仕方ないよ。でもね、実は桜が見れる公園があるんだ」

「桜……見れるんだ、知らなかった！　どこで見れるの？」

海外の話に目を輝かせ始め、スマートフォンを取り出す加蓮。

おそらく地図のアプリで場所を確認するのだろう。

興味を持ってくれたことが嬉しいのか、ちとせの表情もどこか柔らかい。

こうして、夕暮れの中二人は他愛のない話で盛り上がるのだった。

どこまでがプロデューサーの想定内であったのかは分からないが、ちとせと加蓮のステージは問題なく決定しそうである。

ちとせとプロデューサー

事務室にノックの音が響いた、完成したらしい提出用と思われる書類に目を通していたプロデューサーはどうぞと扉の方へと声をかける。

すると、声に反応し入ってきたのはちとせだった。

意外だったのかプロデューサーは少し驚いた表情を見せている。

「まつすぐ帰らなかったのかって？ 加蓮ちゃんはまつすぐ帰ったよ、私は……ちよつとあなたと話がしたくなったのから来ちゃったよ。」

いたずらっぽく笑いながらちとせはそんなことを言っている。

こういった距離感が人を魅了するのだろうか。

「うん、千夜ちゃんが心配しちゃうから長居はしない」

そう言うのと、ちとせの表情は真面目なものへと変わっていった。

加蓮との会話は楽しかったという報告に来た訳ではなさそうである。

「最初はね、私と加蓮ちゃんが似てるっていう見当違いの狙いかと思ってただけど勘違いだった。本当は、加蓮ちゃんの内側にある情熱に触れて、少しでも影響を受けてほしいっていうことだったんだね」

ちとせの答えを聞きながら、プロデューサーは優しく微笑んでいる。

分かりにくいのが正解……なのだろうか。

「私がそう感じているのならそれでいい？ 答え合わせはしてくれないんだ」

プロデューサーは頷いている、どうやら肯定のようだ。

プロデューサーの意図を探るのはいいがそれが正しいのかは自分で見極めろということなのだろう。

「すぐに答えを決めるのは良くない……まあ、たしかにそう……かな。え？ うん、大丈夫、話自体は楽しかったよ。加蓮ちゃんのことも知れたし。そうそう、次は奈緒ちゃんって子と話してみたい、面白くてかわいい子なんでしょ？」

加蓮との話から繋がっているのだろうと察したプロデューサーは面白くなることを確信したのか笑い出した。

恐らく、今ちょうど神谷奈緒が噂話によるくしゃみをしている頃だろう。

「加蓮ちゃんのお仕事が決まれば自然と会えるの？ ああ、仲が良いからつてことね、なら楽しみが増えたかな」

嬉しそうに笑っているちとせを見て、プロデューサーも笑みがこぼれている。

そして、付け加えるように事務所のアイドルたちと色々な交流をして色々な影響を受けてほしいと伝えた。

「そうか……なんとなく分かった気がする。私や千夜ちゃんに変化をもたらす魔法の正体……それはたぶん、あなたを中心とした縁から生まれる人との繋がりなんだね」

腑に落ちたのか、すつきりとした表情のちとせ。

プロデューサーの魔法見極めたり、といったところだろうか。

ただ、ちとせの瞳は虚空をひたすらに見つめている。

「でも、加蓮ちゃんや琴歌ちゃん……千夜ちゃんや魔法使いだってそう……ここにみんなはすつごく眩しくてね。たまに目を背けたくなるときがあるんだ」

ちとせは、未来に向かってまっすぐに進んでいくその姿勢を眩しいと感じるのだろう。

それはきつと、自分には先に続く道が見えないということが理由のはずだ。

まだ見えないのか、途絶えてしまっているのか、本人が語らない限りは分からない。

「本当はね、人に必要とされて、必要とされる努力をするお仕事、千夜ちゃんにこそ必要だって思ってた。心に火が灯って、居場所が見つければ昔の笑顔を取り戻せるだろうか
らって」

例えどれだけアイドルとしてがんばりたくても、彼女はいずれ限界が来ると感じている。

こういった限界がいつ来るのかは不明だが、もしかすると彼女がプロデューサーと出

会うことを予言していた占いで自分の未来を少しだけ知っているのかもしれない。

だからこそ、千夜が居場所を見つけてくれたら辞めるつもりだった可能性がある、少なくとも最初は。

しかし、ちとせもプロデューサーの魔法をかけられている。

変化が起きているのだ。

「だけど、千夜ちゃんとステージに立って、私の中にも小さな火が灯ったの。これは前にも話したよね？」

ちとせに問われるとプロデューサーは頷いた。

そして、プロデューサーは彼女に尋ねた。

その小さな火は加蓮と出会ったことで変化が生じたのか、と。

「そうだね、加蓮ちゃんの内側にある情熱に少しだけ触れて影響を受けたと思う。見た感じの印象よりずっと内側は情熱的なんだね、加蓮ちゃん。まあ以前より変わったとは言ったけど。誰が変えてしまったんだろうね」

そんなことを言いながらちとせが笑いかけると、魔法使いは担当プロデューサーですからと胸を張った。

更に、ちとせも千夜も良い方向へと変わっていけるように努めると口にする。

どれほどの根拠があるのかは不明であるが、心強い言葉ではあるはずだ。

「私って他の子よりきつとできること少ないよ、それでも期待していいのかな？」
他力本願と言ってしまえばそれまでだろう。

ただ、恐らく自分にできることはやった後であるはずだ。
そうでなければ、諦観を持つほど打ち砕かれはしない。

それを察したかどうかは分からないが、プロデューサーはちとせに言葉をかけた。
時に競い高め合いながら、時に励まし助け合いながら、みんなで乗り越えていこうと。
プロデューサーも万能の神ではない、できることには限りがある。

しかし、この事務所には聞けば万人が驚く人数のアイドルが所属している。
最適に近い組み合わせを揃えることができれば、いかなる困難にも対処ができるはずだ。

そういった意味ではプロデューサーの腕の見せ所だろう。

「みんなで……か、今までそういうの聞いたことなかったよ」

休学も挟んでいる以上、学校でも浮いた存在であることは予想ができる。

幼い頃から同じ学校という友人もいないと思われるので、仕方のない話ではある。

「でも、千夜ちゃんとステージに立ったときみたいに……得手不得手をカバーし合いながら、高みを目指したいって今は思えるかな。私が存在した証を刻み付けたいんだ」
プロデューサーは少し驚いた顔を見せた、予想していなかった言葉なのだろう。

加蓮仕込の情熱である。

「加蓮ちゃんにお礼を言わないと、あなたのおかげで私の中の小さな火は強さを増したって。もう、小さいなんて言えないかも」

プロデューサーは嬉しそうに笑うと、加蓮とのフェス参加を目標に活動を広げていくことを伝えた。

二人の関係性は悪くなさそうに感じたのだろう。

今回、話をする場を設けた意味は最初からそこにあつたのだ。

「ありがとう、千夜ちゃんとの時より大変なのは間違いないだろうけどすごく嬉しいよ」
一応、加蓮はソロやユニットの仕事など色々動いているので、一人のときは体力をつけることを目標としたダンスの基礎レッスンを多めに入れていく方針であることをプロデューサーは伝えた。

当然、必ずちとせの体が強くないということ把握しているトレーナーか誰かがついているときに行うという指定がある。

「至れり尽くせりね、感謝しきれないほどだけ……私の心に火を灯したんだから、これくらいしてもらわないと責任取れないかな」

ちとせはいたずらっぽく笑った、ずいぶんと久しぶりのように感じる。

プロデューサーもそう感じたのか困ったような顔で笑っている。

ただ、今後は先ほどまでのような暗い話にはならないはずだ。彼女の心に火が灯っている限り。

「私の用件は終わったし、千夜ちゃんが心配するからそろそろ帰るね。魔法使いは大丈夫？」

特に伝えそびれたことはないようで、プロデューサーは頷いている。

その反応を見てから、ちとせは部屋を出るために扉の前まで歩いていくと最後に顔だけプロデューサーの方へと振り返った。

「それじゃあバイバイ、また明日ね、プロデューサーさん♪」

別れの挨拶とウインクを残して、ちとせは部屋から出て行った。

プロデューサーはしばらく彼女のいた場所を眺めてから提出書類の確認作業へと戻る。

その口元は優しく綻んでいた。